ハンター×カフェ

初花水色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハンター×カフェ

【Ｎコード】
Ｎ２０２６Ｑ

【作者名】
初花水色

【あらすじ】
元ハンターのリドリーは夢だったカフェの店長になることが出来て、平和な日々を暮らしていた。だがある日、元同僚の男・ログが彼女のカフェにやって来た事により、リドリーの平和はもろくも崩れ去る。　カフェを愛するハンターの、カフェ修業兼魔獣討伐の旅が始まる！

序章（前書き）

この話はモンスターをハンターするゲームとは関係ありません。

序章はとてもつまらないので読み飛ばしをお勧めします。

こんなどうでもよくつまらない話は冒頭のみですので、是非次話から。

ではでは、どうぞ。

序章

はじめに、天に神が居た。

神は一人で子を生んだ。太陽の神、月の神、大地の神に海の神を生み出した。太陽は昼の神と大気の神を、月は夜の神と星の神々をたくさん生んだ。

子供たちが多くの神々を生み過ぎたため、原初の神は自身が支配する天を除く地上と海を統べる存在を生み出そうとした。

最初に生まれたのが、黒い血の四足で歩くものたちだった。原初の神はこれを愛したが、黒い血のけものは他の神々の望みにはかなわなかった。子供たちに頼まれて原初の神は黒い血のけものを滅ぼす事にした。原初の神は光の剣を地上に、海に幾度となく突き刺したが黒い血のけものの数は多くすべてをなくす事はかなわなかった。しばらくすると黒い血のけものはまた数を増やしていった。

次に原初の神は、黒い血のけものと子供たちの神々とを仲介するけものを生み出した。二番目に生まれたのが二つの姿を持つけものだった。獣と、子供たちの神々の似姿二通りの姿を持つけものだった。二つの姿を持つけものは、最初こそは黒い血のけものと神々との仲を取り持とうとしたが、原初の神は彼らに知識を与え過ぎた。

二つの姿を持つけものは自らの力を誇るあまりに神々にも黒い血のけものたちにも興味をなくし、自分たちだけの世界を作るようになった。傲慢な二つの姿を持つけものに腹を立てた子供たち神々は、原初の神に彼らを地上から居なくならせてくれと頼みこんだ。原初の神は黒い血のけものと同様、二つの姿を持つけものを愛していたが子供たちの頼みとあって地上に洪水をもたらした。

二つの姿を持つけものは山中奥深くに住んでいたために、山の神はこれをかわいそうに思った。二つの姿を持つけものの中でももっとも清いものを呼ぶと、洪水が来る前に舟に乗って難を逃れなさいと命じた。

こうして一部を除いて二つの姿を持つけものは地上から姿を消した。黒い血のけものは数が増えるのが早く、洪水もものともしなかった。地上にはまた二つのけものたちが増えていった。二つの姿を持つけものは長命だが数としては少なかった。

地上が二つのけものたちによっていいようにされているのを見て、子供たち神々は調停者をほしがった。

原初の神はこれを最後と言いおき、二足で歩くけものを生んだ。この二足のけものは大変よく神々の具合に沿った行動をしたので、子供たちはもちろん原初の神も彼らを愛した。黒い血のけものをよく殺したし、二つの姿を持つけものとも上手くやった。

原初の神は地上に調和が生まれたのを知ると仕事が全て終わった事を知った。自分の生んだ地上の子供たちの中で神々ではないものためにに、いつか新しい楽園へ呼ぼう。その日のために日々を慈しみ神々を祀るのだと伝えた。

原初の神は体を海に横たえると眠りについた。長い眠りは三つのけものたちがいつか新しい楽園を見つけるまで二度と醒めない眠りだった。

こうして、世界に神々とけものたちが存在する。

第一話　カフェ開店1

マーズの町にはなだらかな丘があり、そこには新しく建ったばかりのカフェがあった。カフェの名前は≪十二夜≫、トゥエルブナイトといった。

カフェに居るとリドリーは落ち着く事が出来る。この魔法は何だろうか。

理想のカフェは広すぎず狭すぎず、せいぜい十人程度の客を収容出来る広さが好ましい。それでいて静けさもほどよく存在し、しかしささやかな会話かラジオの音があればなおの事良い。

メニューは多くなくても良い。マスターの渾身のコーヒーが一杯、加えてちょっとしたケーキがある程度でも構わない。豆の仕入れ先や挽き方などにこだわりがあって、長年培ってきたスキルがものをいうコーヒーの香りが店内に満ちあふれている。

そんなカフェの店長に、リドリーはなりたい。

「だから帰ってくれ、ハンター」

娘は青い瞳で客を睨んだ。肩にかからない程度に切りそろえた黒髪は、頭の後ろでひとまとめに丸めてある。まだ若いというのに凛とした空気を持つ女性だ。その青い瞳は女性にしてはやや鋭く、上背もある彼女が立つと威圧感さえある。

そんな空気をものともせずに、カウンター席に座るお客が一人。こげ茶色の髪は、あちこちにはねているのだがそんな無造作なヘアスタイルもこの男にかかれば似合うの一言で済まされてしまう。ものを見透かすような緑の瞳に精悍な顔つきで、十人中九人がハンサムだと口にするような容貌である。そのうちの一人は近眼だろう。

男はコーヒーを一杯注文していたが、カップに一度も手をつけずに店主にほほ笑む。

「お前にこんな趣味があったとはなあ、リドリー。似合うと言ったら嘘になるが、言った方がいいか」

「趣味じゃない、叶えた夢だ。嘘をつきたきゃ他所でやれ。ハンターいいから帰れ」
丘の上にあるカフェ≪十二夜≫。リドリーが店長のカフェだ。
「魚屋のおやじを魚屋と呼ぶように言うの、やめてくれないか。ログでいいと言っているだろう」
ハンターは、魔獣狩人（まじゅうかりゅうど）の事をさすからログの本名とは微塵も関係がない。
「とっとと帰れ！」
だん、とカウンターを叩くリドリーの拳はなかなかの衝撃を机と店内の客に与えた。びっくりした客たちに、リドリーは「ほほほ」と手を口元にやってごまかす。ごまかしきれていないが。
「ほら見ろ。本性がはみ出てやがる。無理なんだよ、お前に大人しくバーのマスターなんか」
「カフェの店長だ！　ここはアルコールは出さない！　コーヒーや紅茶で売ってんだボケ！」
口調の荒くなるリドリーに、ログはにやりと勝ち誇った笑み。
「お前が魔獣狩人（ハンター）を辞めて一ヶ月……まさかこんな事してるたあ思っていなかったが、果たして長く続くのかな？」
店を続けられないに二万ルチェ賭けてるような顔に、リドリーはもう相手をしない事にした。この恨みはカップを摩耗させるくらいに磨いて晴らそう。
しばらく、ラジオのジャズと一組の客の会話だけがその場の音となる。リドリーの予想に反してログが静かになった事で逆に不安がつのる。
ログは、尻のポケットからかさついた紙片を取り出すとカウンターに広げた。それは魔獣の手配書だった。
安い原材料で作られた紙の上には「アーミットー」という名詞がインクによって描かれている。聞いた名前だ、確か強い魔獣だったはず。リドリーは目だけでそれを確認すると、何気ない様子を装った。

「最近、この町（マーズ）の西の方で魔獣の被害が相次いでいる」
ここ最近というものリドリーは自分のカフェ開店に向けて忙しかったから、あまり情報が入っていないため、知らなかった。だがそれが、彼女に何の関係があろう？　たとえついこの間までハンターだったとしても、今は開店したばかりの小さなカフェの店長だ。≪十二夜≫の安泰だけが彼女の全てだ。
「Bランクをつけたぞ、協会は」
アーミットーの手配書には確かに「B」という文字が刻まれている。魔獣狩人（ハンター）協会は魔獣の被害に応じて危険度を設定し、ハンター登録者たちに討伐を依頼する。ハンターはたくさん居るので、依頼とはいえ手配書を配り早い者勝ちで退治させるという形だが。あまりにひどい被害ならば、ちゃんとしたハンターに正式な依頼を頼む。ランクはA以上がそれに相当する。
「Bだぞ」
Bランクというなかなかの大物に、リドリーのハンター魂はくすぐられたりはしない。彼女愛用の武器はこの建物の二階にある彼女の自室、クローゼットの奥深くにしまってある事など思い出したりしない。
「自分の住む町が被害に遭ってるってのに、よく冷静でいられるな」
良心に訴える作戦らしい。あいにくとリドリーは正義感にあふれた優しい人間ではない。この間までハンターをやっていたのだって世のため人のためなどではなく、自分自身のためだった。ハンター業は金になる。ただそれだけでその職に就いた。資金を貯めて、自分の店を開きカフェの店長になるために。それが叶った今、もはやハンター業に興味はない。
「お前一人でも倒せるんじゃないのか」
Bランクは一般的には手強いがログの実力はリドリーより確かなものだ。万全の準備をし、油断をしなければあまり手こずる事もないだろう。何をそんな相手にリドリーを訪ねて来るのだ。
「このBランクを追ってきたら、丁度お前が居る町だっていうじゃ

ねえか。挨拶しなきゃと思ってな」
「なら目的はすんだだろ、帰れ」
仮にもお客様なのでリドリーは注文されたコーヒーを出したが、ログは一口も飲んでいない。その事について文句はあったが、面倒事を持ち込まれてはたまったものじゃない。
「…って、待て。そのアーミットーは移住型なのか？」
眉を上げたログが大好物を目の前にした子どもみたいに目を細める。
魔獣には住居に関する行動が定住型と移住型があり、定住型はひたすら同じ場所に住みそこを侵しさえしなければ害がないものがいる。対する移住型は定期的に移住を繰り返すものがおり、餌とするものがなくなると移住したり季節や発情期に関わる理由で移住したりする。要は引っ越しが好きな魔獣もいるのだ。ログが追ってきて、という表現を使ったなら移住型の魔獣が町に来ているのだろう。
「気になるか？」
したり顔が腹立たしい。リドリーは鼻白んでにらむ。
「うちのカフェまで進出してきてもらっちゃ困る。新開店したばっかだし」
ログは顔をしかめた。
「つまらねえ理由だな」
なんとでも言え。リドリーは今、一つの店を切り盛りする店長なのだ。商売道具の店が魔獣に破壊されては困ると心配しない訳がない。
そのままカップを磨き続けていると、静かになったログにやっと諦めたかなと思う。
「……ハンター辞めて、平和ボケしちまったな、リドリー」
挑発するような物言いが気に入らなかった。しかしリドリーは己の身分をちゃんと分かっている。カフェの店長カフェの店長カフェの店長。言い聞かせるように心の中で唱える。
「コーヒー、まあまあだったぜ」

チャリ、と硬貨の立てる音で振り返るとログは背を向けていた。気がついたら彼に出したコーヒーは空になっていた。何度も彼に背を向けていたリドリーだがいつの間に。

「まあまあってなんだ」

そりゃ、まだまだリドリーは若いし店始めたばかりだし、人気カフェと比べたら批判すべき点はいくらでもあるだろう。まずいと言われるよりははるかにうれしい言葉のはずだ。

しかし元同僚にお世辞くらい言ってはいいのではないか。そして言った相手がログだというのが気に食わない。

ドアベルがからからとドアの開閉を知らせる頃にはもうログは店内にはいなかった。

「……相変わらずなヤツ」

ログはマイペースでなんだかんだと人が良いが、謎めいている。同僚だった時から苦手だった。全てを見透かすような瞳。こちらを面倒事に巻き込もうと企むかのごとき笑み。何度か共に魔獣討伐をしたが、意味深な笑みに慣れる事はなかった。加えて、同世代では並ぶもののないリドリーのハンターとしての実力に、唯一対抗出来るのがログだった。目の上のたんこぶというやつに近く、その実力に羨みながらも嫉妬していた。

そんなリドリーの思惑にも気がついていますよ、という顔をしながらも何も言わない。むしろたまにリドリーを立たせてみせる。余裕綽々な態度がまたリドリーの癪にさわる。

とはいえログとは良いコンビだった。コンビという程仕事を一緒にこなした訳ではないが他のものより息が合い、敵を倒すのに楽にコンビを組める相手だった。ハンター登録者には若い女性は少なく、あなどられる事も多いためにリドリーの実力を期待しない相手は多い。その点においてもログはリドリーを信頼してくれていたように思える。彼の魔獣狩人（ハンター）としての実力が高いためかもしれないが。

悶々と考えながら布巾を置くと声がかかる。

「会計をお願いします」

我に返って客に対応する。
そうだ、リドリーは今、カフェ店長なのだ。妙な事に頭を悩ませている暇はない。客は万来というほどではないが、そうなるように爽やかな接客を心がけねばならない。
「またどうぞ」
朗らかに笑ってカップルらしき二人の客を見送る。これで店内は一人の客だけになった。
小さなカフェに客が一人はきっと十分なものだろう。まだカフェを初めて一週間だが、一人もいないよりはマシだという事はよく分かっている。
しかし、マーズを襲う魔獣の存在自体は気になる。それはそうだろう、守るべきカフェがなかろうと、住まいの近くに脅威となる存在が居るのに気にならない方がおかしい。
城塞都市だった過去をもつこのマーズの町には未だに町を取り囲む城壁がある。町をぐるりと囲み、高くそびえる壁は町の守りになっている。それを越えてやってくるほどの魔獣がいたら、さすがに……。
「いや、私はもう辞めたんだ。ハンターは」
あれは、もう一回やったらまたやりたくなる気がする。カフェで静かに過ごすのもリドリーは大好きだが、まるで正反対のような魔獣討伐も大好きだった。
「いやいやいや」
一人言を繰り返すリドリーに、唯一の客が怪訝な瞳を向ける。それに気がつくと、リドリーは微笑んで返す。
新作メニューを考えよう。そして魔獣の事は忘れるのだ。店に常連客を作れるくらいに、素晴らしいメニューを。
今のメニューは、コーヒー（ブラック、エスプレッソ、カプチーノ、ウインナー、カフェラッテ、エトセトラ）に、紅茶（ダージリン）、レアチーズケーキとサンドイッチ。まずはこれだけで勝負をして、更なる要求をいただけたら増やしていくつもりだ。というよ

り一人で切り盛りするにはあまり多いメニューだと回転させていけないだろうというアドバイスをもらったのだ。
開店以来、新作は初めてでまだ軌道に乗ってさえいないのに新作メニューを考えるのは楽しくあった。
リドリーの心は踊った。カフェのメニュー。それだけでも楽しい響き。彼女にとってはロマンたっぷりだ。他店にメニューの参考に行くのも良い。考えているだけで楽しくなっていた。
魔獣もログの事も客の事も忘れ、鼻唄を歌いながら紙にペンを走らせた。

第一話　カフェ開店2

深夜だった。一軒家を間借りしたカフェの二階にて眠るリドリーを襲う、小さいが確かな振動。長年の癖で深く眠りにつく事のなくなったリドリーは、すぐさま飛び起きた。何かが起こっている。

辺りに武器を探そうとして気がつく。私はもうハンターではないのだ。

窓を開けて夜中のマーズの町を見渡す。リドリーのカフェと住処はちょっとした丘の上、町の全貌とはいかなくとも半分近くの民家が見下ろせる。

マーズは静かな夜ではなかった。うるさいほどではないが、何人かの人間が大声を上げているのが遠くても分かる。

薄暗い町の明かり以外に、目立つ炎のような光が点々として見える。火事かと思うものの、それにしてはあまりにも小さい。夜警が犯罪者でも見つけて暴れ回っているにしては、どうもかがり火が多すぎる。

ログの言っていた魔獣が、マーズに現れた――――？

まさかと推測の一つ取り消すと、首を振って寝台に戻る。火事じゃないならリドリーには関係ない。今のところ、夜中にカンテラに火を灯してまで何が起きているのかを探る野次馬が大量生産されないほどには町に混乱は起きていない。

≪十二夜（トゥエルブナイト）≫は明日も午前中から開店だ。時計を確認するほどではないがもう夜中だ、眠らないと朝がきつい。

自分にそう言い聞かせながら、気がつくとクローゼットの中にリドリーは居た。考えなしに積み上げられた荷物の中に、何重もの紐と袋で包みあげた“それ”を引っ張り出していた。

「私はカフェの店長カフェの店長…カフェの……」

夢遊病者のようにリドリーは無意識で手を動かしていた。と、何者かの気配を階下に感じた。誰かがカフェの中に侵入してきている。

魔獣だろうか？　いや、この気配はまだ人間じみている。魔獣はもっと足音もうるさく鼻息が荒い。魔獣が皆そうだという訳ではないが、侵入者は人間のようだ。

武器の全てを取り出すのは一時お預けだ。リドリーは手軽に持ち運びの出来るいくつかの武器を手に、静かに立ち上がった。ハンターだった頃を思い出すまでもなく蘇ってくるのは自然に出てくる歩行術だ。

自分の住む町に魔獣が現れてよく冷静でいられるな、とログは言ったがリドリーは自分の中でこれと決めたもの以外が侵略されても構わない質（たち）だ。それは夢であったカフェ。侵入を許すつもりはない。魔獣にしろ人間にしろ、リドリーのカフェに夜中に無断で立ち入るなど自殺行為でしかないという事を侵入者は知らないのだろうか。

「私はカフェの店長さ……」

だが時に、正義の鉄槌を下すカフェ店長になってもおかしくはないだろう。人は何も一つの面しか持たない訳ではない。それどころかいくつもの面を、時に反対の性質さえ持つ。

完全に気配を消して階段を降りた。照明を点けない店内はどこかよそよそしく他人行儀だった。階段から見る限りは誰もいない。人の気配もどこかへと潜んでしまっている。舌打ちをしそうになるのをこらえる。相手はなかなかの手練れのようだ。小さな物音でも聞きつけてしまうだろう。

息を吐くのにも細心の注意を払った。

出来るだけ≪十二夜≫の内装をぶち壊すような行為はしたくない。例えば壁に穴を開けるとか。

しかし、炎上でもしない限りある程度の妥協はしなければならない。いやしかし、それでも銃の使用は少し控えよう。

リドリーは身を低く沈めながらゆっくりとカウンターの脇に降り立った。椅子と机があるだけの店内はそれだけでも動き辛いほどに狭い。暴れまわるにはこれでは面積が足りない。

小さく、物音がした。何者かの気配。それはトイレの前にあるち

ょっとした壁の向こうにからのものだった。警戒しながら足をのばすと何かがうずくまっているのが見えた。思っていたより小さい体躯だ。かすかに身じろぎして、まるでリドリーが訪れるのを待っているかのようだ。

カチリ。

「動くな」

やられた。

リドリーは銃口を下にして両手を上げて、正面の物体を蹴り飛ばしたいのを我慢した。立ち上がって振り返ったとしても問題ない相手が、背後には居るのを確認する。

「何の真似？」

案の定リドリーを撃つ気は微塵もないログの両手は銃を下ろしていた。

「お前の腕がなまってないかと思ってな」

余計なお世話だ。ログを睨むが効果は特に得られない。

リドリーが気を取られたのは、魔法具の取り付けられたクッションだった。暗いとはいえ侵入者とクッションの見分けもつかないとは、腕が鈍っているのかもしれない。まだよく見てなかったが、ひとりでに動く魔法具を見た事がなかった分、説得力があったのだろうと言い訳をさせてもらいたい。それが勝手に動いたので、つい動くものに反応したら魔法具に意識を集中させてしまいログに背後を取られたのだ。

「それで？　試験には受かる事が出来たのかな？」

ログの勝手な試験に。受かるつもりはなかったが、不合格と言われても腹が立つ。何も問題ない、といわんばかりの笑みのログが目の前に居ても苛立つだけだった。

「いや、それより他人の家――≪十二夜（カフェ）≫に侵入するに至った経緯を教えてくれないかな」

我が家に入った泥棒も同じ。理由によっては鉄槌も辞さない。リドリーの額に浮かぶ青筋など見えないような素振りでログは片方の

眉を上げる。
「それはお前の腕を試すため――――いや、今はそんな事を言っている場合ではない。町に魔獣が来たのは気づいているだろう」
もちろん、とでも言ってほしいのだろうか。
「だから？」
「暴れたがってるだろうなと思って、手を貸しに来た」
銃を突きつけに来た、ではなくて？　瞳を向けるとログは意外そうに目を見開いた。
「まあ聞け。やつら、町の警備隊はアーミットーの事を何も分かっちゃいない。普通の獣と同じく火を怖がると思ってやがる。だがあれは脅しているだけだと知ると炎には構わない魔獣だ。無駄に闘争心をあおるだけだ」
これだから素人は、とリドリーは思うものだがログにはそんな素振りは見えない。ちっ。これだらログは。リドリーは内心舌打ちする。なんでも自分で出来る男は、かえって何も出来ない素人を蔑まないものだ。というより、ログという男はそうなのだが。思うにリドリーが血気盛ん過ぎるのだと周囲は言っているが、彼女自身にその自覚はない。
「で、作戦はどうする参謀長」
「やめてよね。私はあんたと組むつもりもハンターに戻るつもりもない」
ログが、憎らしい上級生を落とし穴の底に導き出した子どもみたいな顔をして笑った。
「町のやつらを誘導してこっちに魔獣を誘い出すのはどうかな」
「はぁ？」
こっちってどっちだ。リドリーの住まいか。夢の結晶であるカフェか。
「あんた……殺すよ…？」
「だから無理だと言っただろ、お前に大人しくカフェの店員なんて似合わねえ」

リドリーが徐々に戦闘モードになっていくのを楽しそうに見ているログ――いちいち苛つく男だ。それを無視してログがカフェに魔獣を連れてくるのを阻止するため、店を出た。
今やマーズは野次馬たちが明かりをさかんに灯していた。それでも見物客は控え目な方で、警備隊と思しき人間の声以外にはやたらとけしかける声はごくわずかだった。
魔獣の体躯がどの程度のものかは分からないが、町中で退治すると始末が面倒だ。魔獣は死ぬとその体にまとっていた魔導の力を放出するように、異臭を放つ黒いヘドロを死骸から流す。それの処理が面倒なのだ。
リドリーは、町のどのあたりに魔獣が居るのかを松明の場所で見当づけると、近くに広場か開けた空間はないか探す。目視ではほとんど暗いため分からないが、昼間のマーズの地図を脳内に描く。
噴水広場が、あのかがり火の近くにあったはず。思わず丘を駆け下りようとして自分の手の中の武器が足りない事に気づいた。
魔獣の規模がどんなものか知らないが、どのランクが相手でも万全の装備は欠かしてはいけない。リドリーは教えこまれた思想を胸に店内に引き返した。階段の一番上の段に足をのせると、ログの影が彼女に落ちた。
「要るんじゃないかと思ってな」
これ、と重たい武器セットを軽く持ち上げてみせる。あなたの性質は十分よく分かっていますよ、と言わんばかりの緑の瞳だ。
彼はリドリーになんの申し分ない相棒だと感謝させたいようだが、こんな事は今回限りだ。
「ありがとう。でも勝手に人の部屋に入るな」
彼がここにいてリドリーの私物を持っているという事は、彼女の私室にまで侵入した事の証しになる。なんという不躾な。ハンターだった時にも――仮の宿ではあるが――リドリーの部屋にログを侵入させた事はない。
「お前がほぼ丸腰で死ぬのは見るに堪えなくてな」

二人は友好的に微笑み視線を交わした。
「死ね」
「あいにくとおれの寿命は三十だ」
意味不明なやり取りは、リドリーがハンターだった頃からなじみのもの。どうやらログは寿命が三十歳らしい。もっとも、今回はというもので常にそれは変わる。八十歳の時もあれば二百歳の時もある。いつもの軽口を叩くと、もう唇を引き結んで二人は店を出た。
リドリーの武器は、魔法具の一つである魔銃と、魔剣、それから普通の銃が二挺とナイフが何本も。非常用に巨大な斧と弓矢も念のために袋の中に入っている。魔法具は高価なもので、しかし普通の武器より当然殺傷力にも耐久性にも優れている。腰に魔剣とナイフが何本も収納された革のベルトをさす。両手には銃だ。
ログの方もどうやら準備は完了のようで――そもそも彼はリドリーのカフェに侵入してきた時点でしっかりと武装をしていた――長銃を肩に、先ほどリドリーを脅した銃を手にしていた。
町の喧騒が一気にあふれる。それは声の主たちがこちらへ近づいている事の象徴だった。
「……おれがけしかけるまでもなかったな」
リドリーの店兼自宅はささやかな丘の上にあって、その向こうには畑とちょっとした森と城壁がある。町の端に近い。マーズの中心地から魔獣を追い出すのは当然の事だろう。
「このまま北東へ進ませろ！」
「誰か、北の門を開けさせるんだ！」
町の者の松明にひるんで魔獣は駆けてくる。
リドリーの≪十二夜（みせ）≫目がけて。
「嘘だろ……」
けたたましい掛け声、魔獣の吠えるのが耳をつんざく。
やつらは、火をちらつかせてこちらへ向かってきている。最悪のパターンが頭に浮かぶ。ぺしゃんこになったカフェ。燃え上がるカフェ。真っ黒焦げカフェ。

「来るなっ！　こっちへ来るんじゃねえぇぇぇ！！」
例えリドリーのカフェを素通りする可能性があっても、今はごくわずかなものにしか見えなかった。≪十二夜≫の最悪な想像をしたら泣きそうになった。しかしリドリーの形相はそれとは似つかないものでいっぱいだった。
「お前ら、火は逆効果だ！　魔獣は今に気にしなくなる。それにここに足を踏み入れさせるな、このままじゃ」
リドリーがぶち切れる。
ログが警備隊に声をはらしているのにも構わずリドリーは飛び出した。リドリーのカフェとの距離を順調に縮めている阿呆な魔獣に向かって。
なんたってこんな事に。夢のカフェライフ！　カフェ店員どころか店長になれたというのに、魔獣の強襲。一から建てた訳ではない一軒家だが、愛すべきリドリーのカフェ。彼女のためのカフェ。いくらか改築し、内装には彼女の完璧と思う全てをこめた。コーヒーや紅茶のメニューも、若い彼女にはまだまだといえるものがたくさんあると分かっているが、自身が出せる最高の飲食物を提供するのを常に心がけている。
ローカル放送をラジオで聞きながら、ゆっくりとした日常を過ごす。夕焼けの光みたいな黄金の時間を安らぎと共に暮らしてゆく。
それが私のカフェ。私の望み。
それを壊すものは、何人たりとも許す訳にはいかない！

第一話　カフェ開店3

その魔獣、アーミットーは一見すると猪に似た様相をしている。しかしその顎は狼にも似て、牙は鋭いナイフのように尖っている。短い尻尾があるべき場所には、まるで魚の尻尾のような二股に分かれたそれが長く伸びている。背鰭に向かうようにトゲが生えて、体躯は紫色だった。

全長はだいたい馬車一台分くらいに相当するだろう。リドリーが見たもっとも巨大な魔獣は、庶民の建築水準で、二軒分の聖堂並みの巨躯の魔獣だ。要は、それよりはまだ小さい。

「私のカフェに近づくな！」

町人すら蹴散らしアーミットーに飛びかかる。魔剣を振り下ろすと動きの鈍そうな見た目に反して素早く避けた。憎らしさに引っ掻いてやりたくなるが、アーミットーの避けた先がまた一歩、リドリーの店に近づいていたのを知ると彼女は自分を引っ掻いてやりたくなった。

「くそ！　そこからどけ豚肉野郎！」

豚に見えなくもないが、魔獣相手にあしざまに言うリドリーは勇ましさを飛び越えて野蛮にすら見えた。もちろんそんな事をログが口にすればあの魔弾の入った銃口がこちらを向くのは明白だ。

ハンター業を辞して、“穏やかな町娘になれたはずのリドリー”は今やすっかり身を潜めている。どうやら様々な努力をしていた（かもしれない）ようだが、残念な事だ。ログにとっては好ましくあるが。

「そっち行くなっつうに！」

リドリーの攻撃の手を避ける魔獣がまたカフェに近づくと、彼女は追いかけた。アーミットーの魚の尻尾が翻ってリドリーの背を狙う。ログはもう照準を合わせてあった。何も言わずに引金を引くと魔獣の尻尾はあと一歩でリドリーを打ちのめす事が出来たのに、つ

ぶてのような弾丸に妨げられた。
「後方支援というタイプじゃねえんだがな」
≪十二夜≫の前に立ちはだかりアーミットーの目の前に現れ出でたリドリーは、ログの援護射撃に今頃気づいたようだ。ありがとうと言いたいような瞳がすぐに曇る。ログに借りを作ったのが問題だとばかりに顔をしかめたのかと思いきや、アーミットーが目の前に迫っていたからだった。
ログもカフェからは離れてしまっていた。町人たちを蹴散らすのに必要だったからだ。しかも、彼らは未だに自分たちの手で魔獣をどうにか出来ると思いこんでいる。彼らは邪魔だった。ログは彼らの前に立ちはだかる。
「おれたちは魔獣狩人（ハンター）だ、不安なのは分かるが引っ込んでいた方が身のためだ」
「あの魔獣をここまで追いこんだのは我らだぞ。やつには火が有効だ、それを…」
「黙ってろ」
一言で、警備隊たちが黙りこんだ。それほどまでにログは説得力がある顔つきをしていたからだ。まるで彼らが黙らないとログが何をするのか分かってしまったかのような顔つきだ。実際に何をしでかすのか分からないのは暴走したリドリーだが。
「火を消しておけ」
静かになった警備隊たちにそれだけ言うと、ログは相棒の元に向かった。
「や、やめろーーーっ！」
見ると、リドリーが利き腕に怪我をしていた。その隙に魔獣が飛びかかったのはリドリーの≪十二夜≫ログが慌てて長銃をアーミットーに向けたが、何発弾丸を食らっても魔獣は避けなかった。
アーミットーがカフェの正面に全身を突っ込む。追いつめられた手負いの獣のように、猪突猛進しか出来ないのかもしれない。リドリーが悲鳴を上げた。

ログは、ちょっと駆け戻って警備隊から松明を奪った。アーミットーが普通は火に慣れてしまうタイプだというのは常識だが、魔獣だって十人十色だ。火にひるんでしまうのなら、≪十二夜（トゥエルブナイト）≫から離すためには今は利用するのも悪くないかもしれない。

今のリドリーがとりかえしのつかない事をしでかす前に、こちらに注意を向ける必要がある。

魔獣の前に立ちはだかるには、あちらがカフェから出てきてくれないと不可能だ。泣きそうな顔をしながら弾丸を撃ちまくるリドリーに呆れながらログはアーミットーを追い出させるためにカフェの裏口に回った。

ログは少なからずぎょっとした。魔獣はカフェの中を何かのにおいでも探るように鼻先を振り回していたからだ。

（何をしてやがる？）

そっと侵入し、火を振りかざしてやるとアーミットーは反応した。食材の箱に首を突っ込んでいた魔獣は顔を上げる。そこへリドリーも飛んでくる。

「どけ魔獣。覚悟は出来てるんだろうなあァ？」

「お前のカフェは猪にもうけるようだ、よかったな」

「よくあるかッ！」

しかしアーミットーは今頃火に怯えなくなっていた。むしろ火に向かって来る。つまり、≪十二夜（カフェ）≫の中から出る気配が微塵もないという事だ。リドリーを怒らせたいのか、アーミットーは前足で強く床を破損させると、威嚇するように吠えて、鼻先で机を突き飛ばした。二人のハンターはそれによって引き起こされる二次災害などに顔を手でかばっていたが、一人は最早それどころではなかった。

「ぶたぁあああ！」

リドリーが雄叫びを上げた。どこからかサブマシンガンを取り出して、一斉掃射。ログは危険を察知し本能的に一気にカフェを飛び出した。リドリーは怒りに我を失っている。

「死ねっ！」

アーミットーが動きを止め、ぐらりと体を倒したのにも関わらず、リドリーはサブマシンガンを撃ちまくる。ログが「もう死んだ」と止めるとやっと気がついたように手を止める。
魔獣はカフェの中で倒れた。ずん…と重量感ある倒れ方をすると、体から有害な体液を流して息絶える。
どろどろと流れ出る黒い体液に、やっとリドリーは目の前のものが信じられない——信じたくない光景だと知る。
「う…嘘……」
弾痕で穴だらけの蜂の巣状態のカフェ内部。真ん中には死んだばかりのアーミットーが有害な体液を広げている。ちょっとすすけた壁や天井（ログの松明のせい）がかわいらしく見えるくらいに、その被害はひどかった。なまじ普通に建っている分倒壊したより中途半端に哀れっぽかった。
「嘘だ……」
がしゃん、とサブマシンガンが地に落ちた。ログが眼球だけでリドリーを見ると、彼女はこれまで以上に泣きそうな顔をしている。
「私の≪十二夜（トゥエルブナイト）≫が…！　嘘だ！　嘘だと言ってくれーーーー！！！！」
ボロボロだった。
ここでログが「嘘だ」と言ったら多分殴られるのだろう。
静かになったこちらを後目に、警備隊たちはにわかに賑わいを見せる。
「魔獣を倒したぞ！」
「おぉぉ！」
どよめく中、誰かがアーミットー自身とその有害な体液の処理をせねばならないと言い出したようだ。ばらばらと警備隊員が後始末のための道具を取りにに丘を下って町中心部へ行く。
これで全ては一件落着、大団円、全てまるく納まったと口々にさわぐ彼らは膝をついて声の出せない、一人のハンターを知らない。
まさかとは思うが倒れやしないだろうな、とログはカフェ店長の

正面へと足をやる。リドリーははた目にも冷静とはいえず衝撃を受け悲しんでいた。感情の変化は大仰ではないものの、彼女の受けた衝撃がいかほどのものかはよく分かる。
「町外れなのに一軒家だから家賃が馬鹿にならんのに……修繕費……内装にどれだけの費用を使ったと……一品もののカップアンドソーサー……オークションでばかみたいな金出して買ったＶＩＰ用のアレとか…何ルチェしたと思ってるんだ……？」
ぶつぶつと呪詛を吐くように恨みにもなれない嘆きを口が勝手に言葉にする。リドリーのカフェは修復不可能な状態じゃない分、かえって悲惨さが押し寄せてくる。欠片でも高価な物品が残っているのを見るのはつらい現実を見せられていて、いっそ全て炭になってしまえば諦めがついたのに、皿をパズルのピースのように集めたくなる。そんな事をしても何も元に戻らないのに。
「大丈夫か……？」
発狂しないよなとか、また暴れ出したりしないよなとか、泣くなよなとかいろいろログは思っていた。
「あはははは！！」
突然奇声のような笑い声をリドリーが上げたので、つらい現実に堪えられなかったかとログは瞼を閉じる。
「家賃の取り立て？　壊れた箇所の修繕？　貯金もう底ついてる？」
疑問形で話す彼女が意味不明で、眉をよせながら視線をずらす。ログの視線の先にはひきつれた笑みのリドリーが居た。
「……ふっ…」
彼女は瞼を閉じ一度顔を軽くうつむけると、勢いよく天をあおいだ。
「知るか…！！」
実にさわやかな笑顔だった。まるで長い間労働をさせられていた者が休憩を告げられたかのように。長年の研究成果が世界中に認められた報せ来たのを妻に告げる研究者のような。
「何、ここんち大丈夫？　ひっどい被害。まあ私には関係ないけど。

とりあえず旅に出ないとだし！」
「現実逃避？！」
勢いがあり過ぎる現実逃避だ。何も自分に関係ないと決め込むのか。あまりに突飛過ぎるというか、自分のカフェに対するあれ程の愛着はどうしたとログは言いたい。
「馬はどこだ！　目指すは日の沈まない地！　西へ！！」
まるきり今考えついたような――いや、舌に任せるままにしゃべっているリドリー。止めた方が後々彼女のためになるのかもしれないし、少なくとも店を貸している人物のためにはなるのだろう。
酔っ払いのたわ言並みに真実味のない事ばかり口にするリドリーを、しかしログは止めたりはしなかった。好都合だ。にやり、と生き生きした瞳で彼女を追った。

その後、戻ってきた警備隊員たちがリドリーとログのハンターたちの姿を見えないのを怪訝に思い、カフェに残っていた警備隊員に聞いたのだが、彼らの行方は分からなかった。リドリーのカフェ≪十二夜≫はまだ開店して間もない。店主が誰だかは分からなかったし、まさかハンターがカフェの店員をやるなんて誰も思っていなかった。そのため、通りすがりのさすらいハンターが無関係のカフェを救った（？）のだと思われていた。
その夜、マーズの門番は西の城門を夜中だというのに強引に脅されて開門したが、それが今宵の魔獣退治と密接な関わりのあるハンターだったと知るのは、次の日になってからだった。門番は夜中なのに高速で馬を走らせる者とそれを追う者を闇に溶けてからもぼんやりと見ていた。

月の明るい夜だった。無粋な雲がそれを時々阻むのだが、月明かりは急ごしらえの旅人の旅路を照らすには充分だった。
笑い声を上げたりぶつぶつ言うのがやんで、前方を走るリドリーがうつむいていたのに気がついてログは口を開いた。
「泣い…」
「泣いてないっ！」
リドリーは男泣きに泣いた。ログは男が泣いているのを見守るように対応した。無言で、余計な慰めなどかけない。というか、冷静になって泣けるならカフェに戻った方がいいと思ったりしないだろうなあと警戒もしていた。
せっかくリドリーがやる気になってくれたのだから。ハンターに戻るとは一言も言ってはいないが、彼女は自身の武器セット一式をちゃんと持ってきている。まるでこれから魔獣討伐に行くかのような様相だ。旅道具がいささか足りないが、次の町で買えばいい。
心のどこかでは前のようになればいいとは思っていたが、まさかリドリーのカフェがボロボロになってリドリーがこんな行動に出るとは思ってもみなかった。
リドリーの住む町に来たのは偶然だった。魔獣を追っていて通りかかった町が、リドリーの退役後の住まいだというので訪ねた。まさかカフェなんぞやっているとはログは夢にも思わなかったが、彼女は変わっていないようで安心した。
口角が上がるのも仕方がない。人生、そしてハンター業は何が起こるか分からないから楽しい。
駆ける二頭の馬は西を目指して夜通し走って行った。

第一・五話　カフェ開店――のちに閉店

マーズの丘の上にある一軒家をとある人物に貸している物が、魔獣襲来の現場に来たのは事件から三日たってからだった。彼は仕事で町を離れており、知らされたのはマーズに帰ってからだった。

魔獣は片付けられたものの、管理者不在のカフェはひどいものだった。

家具や食材の入っていた木箱などがカフェの内外に散らばっている。ヘドロが木材をいくらか侵食しており、長年雨風にさらされたかのように腐っている場所も多い。何よりかなりの量の弾丸が打ち込まれていて、どこの戦場だここは、という様相。重傷の建物がそこにはあった。

元々は自分の管理する建物を他人に貸していた男が、凄惨な風景を見て一息に言った。

「……手っ取り早く、殺りますか」

「早くない早くない」

ツッコミ役は彼の部下（のようなもの）だった。長年の付き合いで分かってしまうが、誰を「殺る」つもりなのか、それによって何が導き出せるのか、相手が言わなくともよく理解できてしまう。

「何がひどいって、この放置プレイ。カフェ愛はどうしたんですかリドリー！　プレスコット！」

本来の家主は両手を広げて、劇場の舞台に立つ役者みたいな素振りをしてみせた。そうして訴えたい本来の相手はいないのだが、ひどい有様を誰彼構わず伝えたくなる。

「自分の旦那が愛人連れてきたから見捨てたくなった、みたいな状態だったんじゃねえのー」

「分かりにくい！　例えが分かりにくいよギベルティくん！」

ツッコミ役は反転し、比喩の上手くない友人を持つ男は声を荒げた。彼の比喩はいつも分かりにくいと分かっているのだが、今回も

理解不能と口にしなければ気がすまない。
「息子を有名学校に入れたのによりバカになって帰って来たような…」
「尚更よく分かりませんよ！」
「まあ、プレスコットのヤツは投資の塊を見捨てたって事だけはようく分かりますがねえ？」
二人は、カフェの残骸を見つめた。取り残された哀れなカフェを。同情するに値すると一人が口を開く。
「かわいそうなクリスティーナ……」
「誰だよ」
「私が責任もって直してあげる…人を連れてきてあげますからね…！　もしくはその人を殺って保険金を！」
「クリスティーナって…この家の事言ってんのか。だから殺すなっつーに」
ぽんぽん飛び出す二人の人物の掛け合いを、通りかかった農家の男が口を開けて見ていた。
彼ら二人が、リドリーたちに会うのは先の話。

第一・五話　カフェ開店――のちに閉店（後書き）

蛇足的で幕間的な話でした。
短く失礼しました。

第二話　カフェ修業１

朝日の残光の中、ティモールの町は賑わい始めた。それをカフェのテラス席に腰掛け眺める二人組が居る。

一人は二十代くらいで引き締まった体躯の若い男だ。疲れたようなこげ茶の髪の乱れも彼の持つ魅力を半減させる力にはならない。朝日が眩しそうに時折目を細めるが、その奥の緑に人をからかうような色は見えない。今はまだ。男は長い足を組んで、机の反対側に座る女性を眺めていた。

こちらもまた、二十代そこそこの若い女性で、疲労した様子がなければ相手をはっとさせるような強い意志を持った魅力的な女性だと分かっただろう。黒い髪は苦悩のためにかき回され、かなり乱れておりぼさぼさで、きちんと働いていた時には結んでいたのも忘れている。女性にしては高い背を、今はぐっと首を折る事で縮めている。顎を組んだ両手の上に載せ、彼女はうめくようにつぶやいていた。

「カフェ修業の旅。それは、世界各地の素敵なカフェをめぐり、本当に居心地の良いカフェとは何かを探すための旅である……」

「長い現実逃避だな」

ログにとって好都合な事に、現実逃避の末にリドリーは無惨なカフェを後にしてまで旅に出た理由を無理矢理こじつける事に成功したらしい。

「そして、美味しい豆や食材の仕入れ先を探すための旅でもあり…」

リドリーはログを無視する事にしたようだ。

「なおかつ世界を回って旅するという事は見聞を深める事であり、インテリなお客さまとの会話の潤滑油を作るための…」

おそらく彼女は、カフェ熱を他所に向ける事で過去のカフェ（自分の店）の無惨な姿を忘れようと必死なのだろう。いつか現実逃避から冷めてとんぼ返りしそうだが、その前にハンター業の楽しさに

病み付きにさせてしまえばいい。ログは片頬だけ上げて笑うという器用な事をして、一人の世界に入る相棒を放っておく事にした。
ハンター協会本部はここから遠い。支部はティモールにもあるようなので有り難い。とりあえずまた魔獣討伐の手配書があるといいのだが。リドリーを魔獣退治せねばならぬ状態にでも落としてやれば――全くの偶然だが、せんだってのリドリーカフェ魔獣来襲のように――彼女はまたカフェの事を忘れざるを得ないだろう。ログは人混みに紛れて瞳だけで笑うと、魔獣狩人協会支部を探しに出かけた。
そんなログにも気がつかなかったリドリーは、少しばかり憂鬱を解き、訪れたカフェの雰囲気を楽しめるようになった。店の名前はカフェ・シャブラン。白猫という名の優雅なカフェの名前だ。隣国ソワール風の名前からしておそらくはソワール出身かソワールかぶれが店の経営に関わっているのだろう。
頼んだのは、ブラックコーヒーと紅茶とレアチーズケーキ。どれもリドリーの店にも存在するメニューで明らかに敵情視察そのものだが、彼女は今の自分のカフェがどんな状態だかというのは忘れる事にしている。それとこれとは話が別である。帰る頃には魔獣のヘドロが乾いているといいな、みたいな認識。
さて、ティモールの町で評判かどうかは知らないが朝から人気（ひとけ）の比較的多いカフェを一つ選んで飛び込んだら、カフェ・シャブランだった。レアチーズケーキがあるのは好都合とばかりにとりあえず飲み物と同時に頼んだ。カフェの店員はハンサムで若いが丁寧な接客をする教育の行き届いた人物で、とてもいい印象を受けた。
ちらりと見えた厨房からは女性の声。元気に働く女性を見るのはリドリーは好きだ。テラス席のパラソルもリドリーの好きな色、オレンジでつい見上げたくなってくる。
リドリーは、このカフェが好きになりかけていた。果たしてスパイ行為のメインである飲食物はというと。
ほんのりとした湯気を吐き出す黒い液体は、覗き込むリドリーの

顔を写し出している。香りは風味豊か、というほどではなくやや控えめかもしれないが、なんともいえない鼻腔をくすぐるコーヒーの香りは確かにその味まで保障してくれそうに良い香りだ。唾を飲み込んで、コーヒーのカップを手に取る。まずは一口、と思ったが意図せず三口も喉に通してしまった。

「う……美味い…！」

コーヒーはリドリー好みの風味の高さに、まろやかな口当たり。喉の奥に広がる後味も、さっぱりしているようで旨みがある。さすがに豆はどこのどんな品種を使っているなと分かるほどにリドリーはコーヒー豆通になれてはいないが、味に一切の妥協をしない店主の人柄がうかがえる。なんの掛け値なしに美味しいと言える一杯だ。認めるのは難しい事のように思えるが、リドリーの淹れるコーヒーよりも美味しい。負けたと思うが、こんなコーヒーなら負けても構わないかもしれない。

対する紅茶はというと、コーヒーの衝撃が強すぎたのだろうか、あまり力を入れていないのか。少しだけ苦味が目立ち、リドリー自身の好みにもさほど沿わなかった。飲めない訳ではないが、コーヒーとは比べるべくもない。これならまだリドリーの紅茶の方が美味しいと言ってくれる人も少なくないかもしれない。

『コーヒー、まあまあだったぜ』

頭にふらっと現れたのはログの一言だ。リドリーは今、シャブランの紅茶はまあまあだなと思ったのだが、自分だって先日ログにまあまあと言われたような身だ。他所の心配より自分の心配をしなければならない。一部考えたくもない“アレ”があるとはいえ、このカフェ修業の旅は実際よい機会になるだろう。開店直後に旅は早すぎる感が否めないが（あるいは遅すぎる）、好きな事について学ぶ楽しさを前にはささいな事でしかない。

リドリーは改めて自身の未熟さと、向上心を忘れてはならない事を思い出し、冷水をかけられたように引き締まった気持ちでケーキに目を向ける。彼女は何故かケーキの中ではレアチーズケーキが一

番の好物だった。理由はよく分からない。ただなんとなく、気がつくとケーキ屋の前ではそればかり見ている。苺のショートケーキやマロンモンブラン、ザッハトルテなどいくつもの選択肢を与えられてもレアチーズケーキを選ぶ事が多い。

そのため自身の店のメニューにもレアチーズケーキを入れて、いつか自信作といえるようなものを作り出そうと心がけている。ゆえにフォークにかける力も強い。

白いレアチーズケーキは、なんの装飾もなく積もった雪を思わせるシンプルな見た目だ。四十五度に切り出されたケーキの底には、ビスケットの茶色がケーキ全体を支えているのが見える。ケーキは、強い力を必要としない柔らかさでフォークを受け入れた。きめ細かい断面は見事としかいいようがない。一すくい、口に運ぶとまずはさわやかなレモンが口いっぱいに広がった。

控え目な甘さ、しかし舌の上でとろけるように広がるとほのかな甘味がしみだしてきたように感じる。心地よいレモンの酸味がそれに拍車をかける。さっくりとしたビスケットもまた、食感がケーキとは異なりほど良い二重奏を奏でている。

リドリーが愚痴（？）ったりもたもたしている間にわずかケーキは冷えをなくし、ぬるくなってしまっていたが、そんな事が微塵も気にならないほどに完成された味だった。冷めても美味しいスープのように。

「う、うま……！」

これほどまでに美味しいレアチーズケーキは久しぶりだ。もしかしたらリドリーの歴代絶品レアチーズの中でも二位に迫るかもしれない。

何度もフォークを口に運ぶうちに、自身の手の隣りにあるナプキンに印刷された文字に目がいく。

『カフェ・シャブラン』

白い猫。それだけで十分だった。このカフェは、カフェの名に恥じぬように白いスイーツには何よりの手をかけているのだ。

なんという素敵な心意気。店の名前を大事にするように、店の名前が与える印象を何よりも大切にしてそれを目に見える形で提供しているのだ。

「なんていいカフェなんだ……！」

リドリーは感涙しかけた。

よくよく見れば（気がつくのが遅いが、彼女は他の事に気をとられていて気がつけなかった）、ケーキフォークは持ち手の先がくるりと丸くなっている。まるで猫の尻尾のように。またささやかな意匠に心の琴線がくすぐられる。リドリーも、こういったほんの些細な点にも店主の意向を、楽しみを感じさせるような店がとても好きだった。

「就職したいぞカフェ・シャブラン……！」

もっと内装も見たいがテラス席からでは不十分だ。昼はここにランチを食べに来よう。リドリーの店のランチメニューは乏しく、サンドイッチしかない。こちらはメニューももっと豊富で、選び甲斐もあるだろう。

カフェ・シャブランのまだ見ぬランチに胸を躍らせるリドリーは、ある事に気がついた。

リドリーは自分のカフェのために有り金全てをはたいた。そのカフェはしばらくは開店不可能な状態になり、着のみ着のままリドリーはカフェを飛び出した。カフェのレジスターにも寝泊まりする二階にも、わずかなお金はあった。食材仕入れのためのお金は銀行で借りている。今現在の彼女の所持品は武器のみ。

このカフェのお会計を払えるような客ではない。唯一の所持品である武器を売るわけにはいかないだろう。

頼みの綱のログはいつの間にか居なくなっている。空の席を睨む。

「…早く帰って来い、ログっ！」

拳で握った猫尻尾フォークが、ぐにゃりと曲がった。

第二話　カフェ修業２

リドリーがカフェ・シャブランで雄叫びを上げていた頃、ログはハンター協会ティモール支部に居た。一見して一般的な木造住宅と代わりのない、広くもない家屋の中で、ログは受付けの長い机に手をおいていた。

「せめてＣランク以上はいないのか」

支部には魔獣討伐の手配書は、ＣもしくはＤランクしか見当たらなかった。いや、ほとんど全てがＤランクといっていい。Ｃランクは最下位のＤランクより上で、ＢでなければＣという程度の、Ｄほど弱くはないが強くもない魔獣がＣランクに格付けされる。当たり外れが多いのがＣランク。Ｄランクに至っては、ちょっと力自慢の農民でさえ倒せるレベルの魔獣を指す。

新人に回すのがＤランク。暇人に回すのがＣランク。挑戦するならＢランク、玄人ならばＡランク。死ぬ覚悟でＳランク。今までただ一度だけ格付けされたというのが幻のＳＳランク。

伝説になった男が一人、仲間とＳＳランクを倒したといわれているが、昔の事なので定かではない。

「いやー、ここんとこ平和でねぇー」

丸い頬骨で目尻の下がった男がまさに平和の象徴とばかりに微笑みながら答える。ログとてなにも平和が憎い訳ではないが、Ｃランク程度ではあまり金にならない。加えてＣランクは当たり外れがある。魔獣の強さに応じて賞金がもらえるのだから、Ｃランクなどは賭事に近いところがある。

「そいつは結構。本当に、Ｂランクはおろかランクの手配書も来ていないんだな？」

「悪いねえ、あれば出しているんだけど」

当たり前だ。急ぐ旅ではないが、リドリーの意識を他所へやるためには一定ランクの魔獣狩りが必要不可欠なのだ。とはいえ無い袖

は振れぬ。
「分かった。またCランク以上が入ったら、取っておいてくれないか？」
「ああ、それは請け負うよ。なんせ最近はとみに平和でね、うちの支部を拠点にするハンターたちもどうも血気盛んになるのを忘れちまったみたいでさ、Cランクをアンタにやっても文句言う気概のあるヤツぁいねえみたいなんだ」
「そいつは有り難い。よろしく頼む」
気のいい職員で助かった。ログは今一度、掲示板の手配書を見てCランク以上の存在しないのを確認すると、目尻の下がった職員に目礼して支部を後にした。

明け方にこの街に着いたログとリドリーは、まだ宿を取ってはいなかった。疲れたために厩に馬を頼むととりあえずという事でリドリーに引っ張られてログはカフェに連れ込まれた。以前は気がつかなかったが、リドリーはハンターの時でも街に来たらカフェによく寄っていたような気がする。
まず第一に優先するのがカフェとは、なんだか苦笑がもれそうだが彼女が忘れているのならログが宿を取るしかあるまい。
どうせ二つ部屋を取らなければならないし、節約ハンターが泊まるような素泊まり格安宿でいいだろうと見当つける。リドリーよりも金持ちなだけでログも所持金には余裕がある方ではない。だからこそ早く魔獣討伐をして賞金を手にしたいのだが、それがかなわないとなるとそのうち街の中か外で野宿となる。リドリーも野宿ぐらい毎日のようにしていた時期があるくらいだ、文句は言わないだろうが金はあっても困らない。
人気の少ない、薄暗い通りへとログは足を進めて行った。いかにも安い宿を探して。

何故いつまでもたってもログはやって来ないのか。昼近くになって、長居するのが辛くなってきたリドリーは、ランチを頼みたい衝動と戦っていた。ログも財布がぱんぱんという訳ではないだろう、まして借りを作るのは嫌だ。

そろそろランチを頼む客が現れたようで、コーヒーや紅茶たちには到底出せない香ばしくも塩気の感じられるランチの匂いが漂ってくる。あれはガーリックの効いた料理だな、と分かると拷問のようだった。焼いた肉の匂いにソースの――何ソースかは分からない――かけられた料理の皿が簡単に頭に描ける。

「ログ……っ！」

嗅ぐだけで唾液が出る空気を前に、お会計を気にして（というより無銭飲食になるのを）何も食べずにいるのはかなりの苦痛だ。

パンの匂いがする。それから焼いた肉の――ベーコンの匂いが。

「ランチプレートセットです」

店員の声が、思っていたよりリドリーの近くで聞こえたために思わず振り返ると、屋内に居る他の客への料理だった。振り返ると食べたくなるから我慢してきたのに、見れば皿を四つに分けたプレートにのぼるランチメニュー。サンドイッチ、豆のサラダ、ピーナッツチキンに海老のフリッター。クラムチャウダーのスープ付き。出来立てほやほや、湯気も出ている。あれで食欲をそそられないのなら人生の半分は損をしている。

見るんじゃなかった。リドリーは無理矢理にランチプレートから目を引き剥がした。実物を目にして、リドリーの腹は情けないほどに空腹を訴えてきた。ハンター時代には水と携帯食以外何も口にしないで三日間過ごした事もあるのに。

「平和ボケかな……」
哀愁漂う目には、ログの訳知り顔が浮かんできて、あの顔を思い出しただけで腹が立った。腹が立つと空腹がほんの少しだけ紛れたのでログに感謝した。
「あの、ずっと居らっしゃいますけれどランチ頼まれますか？」
ついに店員に声をかけられる始末。リドリーは心中でうなった。しかもあのちょっとグッドルッキングな店員だ。なんだか悔しい。何がどうとはいえないけれど。
「えーっと、そう……私…待ち合わせしてるから」
リドリーはだからなんだと自分にツッコミたい気分でいっぱいだった。待ち合わせをしているからこそその間の退屈を一杯の茶でうるおせと思われるかもしれないのに。店側としても何も頼まない客を長々と留めるのは楽しい事ではないだろう。
「ちょっと待って、やっぱり頼むから」
もうログに支払わせるつもりでいた。ランチ代も。
ランチのメニューは豊富だった。店の名前が隣国風のせいか、隣国の料理も多い。注文はセットか単品。ガーリックトーストと魚のポワレが気になった。ガーリックは特に匂いにあてられた。飲み物はカプチーノをいただこう。
「この…」
「まだ食うのかお前」
今更ログの登場。遅いとばかりにリドリーは顔をしかめる。
「まだって何だ、私は朝からケーキしか食べていない」
ちらり、店員がログを見る。肩をすくめたログは店員に目で合図した。
「ならおれも、何か頼むから待っててくれ」
店員は了承の言葉を短く口にすると、一歩下がって待機状態になる。ログが席につくのを待つと声をひそめてリドリーは言った。
「どこほっつき歩いてやがった、あァ？」
「言葉がハンター時代に戻ってるぞ。それになんだ、浮気性の旦那

を咎める妻みたいだな」
　リドリーは顔いっぱいにしわを集める。聞きたくない言葉が聞こえた気がする。ログは心の中では何かを企んでいそうな瞳で、しかし満面の笑みで笑った。不潔な人間を見るような目でリドリーはログを見た。
「浮気性をわざわざ教えてくれる訳か。有り難いね」
「喩えだ。気になるか、浮気性かどうか」
「ならない」
「確認してみてもいいんだぞ、おれが浮気性かどうか」
「ちっ」
　話にならないと盛大な舌打ちに歓迎され、ログは眉を上げる。そのままリドリーをからかおうかと思ったが、所在なさげな店員と目が合ったので注文を頼む。
「……おれはこのランチプレートセットを。コーヒーは食後に」
　リドリーは先ほど気になったもの全てを頼んだ。解放された店員は軽やかに厨房へ向かって行った。
「で、結局どこ行ってたん……あ、そうだ。ここの会計頼むわ」
「もちろん。紳士ですからね」
　冗談めいたログの瞳は、年下の兄弟に嘘を真実だと刷り込ませようとしてるかのように輝いていた。リドリーがすっかりお金に困っているのをお見通しなのだ。
　いつの間にかログの優位である。リドリーは大抵の場合がこうである事に、うんざりしてため息をつきたくなった。
「必要なものがあると思ってな。支部に行ってみたが……手配書はDランクしかなかった」
　彼の言う必要なものとはもちろん金だ。それによってもたらされる装備不足の解消も必要な事だ。腰を下げて座り直すと、ログはくつろぐ事に決めたようだ。肩を回して一仕事終えたかのように体をほぐす。
「ついでに宿も取っておいた。まあ、安い宿だが」

「野宿でもよかったのに」
ログがお金に困っていないようには見えない。そう言ったようなものだが、ログはそのまま頭を上向けて瞼を閉じた。
「金はある時に使っておかないとな」
「いいけど、今回の事は貸しだからな。返すつもりはちゃんとある。恩になんか思わない」
瞼を上げたログはリドリーを一瞥した。
「……お前らしい。それでいい」
再び瞼を閉じる。何かそんなに疲れるような事があったか？　とリドリーは怪訝な顔をする。
「しかししばらくは返す手立てがないな……。いや、魔獣討伐すればいいか。分前は割り勘だろ」
「ああ。どんな役立たずが同行しても、Bランクまでは割り勘、だ」
魔獣狩人（ハンター）たちの規則（ルール）ではそういう事になっている。ハンター見習いみたいな者でも、魔獣討伐に成功すれば褒賞は他の仲間と頭数で総額を割られる。多少の交渉はなきにしもあらずだが、こうやって平等のルールを作らないとチームの連携も上手くいかないものだ。一番多く傷を負わせたものがより多くの賞金がもらえるなんて事になれば、パーティーを組まないしワンマンプレイばかりになり自滅に近づく。魔獣討伐はそんな事ではいけない。表題は世に仇なす魔獣たちが人の命を奪う前に倒す事が最優先の目的としているのだ。
新人ばかりが良い目に合うかのようにも見えるが、誰かに頼りきりでは成長出来ない。結局、魔獣退治に楽などないのだ。
「役立たず、ねえ…」
誰の事を言っているのやら。そうこめて視線を投げればログは瞼を閉じたまま何も答えない。眠っているかのようだ。
そういえば夜通し馬を駆り街に明け方着いた。まともに睡眠をとっていない。ログも眠くない訳ではないだろう。リドリーもなんだか、瞼を閉じた人物を見ていると眠くなってきた。
一眠りするか。思うまでもなく、瞼は勝手に下りてきた。あたた

かな陽気で昼間だ、眠るなという方が無理な話。
「ランチプレートでーす」
はしゃいだような声に身動ぎする。髪を一つにまとめた娘が、ログを気にしながらプレートを机に置いた。
「ガーリックトーストと魚のポワレもお持ちしましたぁ～」
ログは目を開けていた。片方の頬を上げて「どうも」と言った。それだけで店員は、意味ありげな視線のまま名残惜しそうに二人のテーブルを後にした。リドリーが結婚詐欺師を見るような目でログを見ると、「食わないのか？」と食い意地のはった妹でも見るような瞳が返ってきた。
食うっつの。リドリーはうっかり怒りに任せて食事を始めようとして、ナイフの手を止めた。
「……そうだ、敵情視察、技を盗む…」
あくまでカフェ修業の一環なのだここに居るのは、という事を思い出す。それからは黙々と味を心で批評しながら食事をするリドリーを観察するのはログだ。
こうしてみると、リドリーが過去にも食事の際に何が美味しいかどうかを考えながら食べているのを見た事があったなとログは思う。野宿の携帯食の時はもちろん除くが、珍しくどこかの安くはない店に入ると、いつもよりリドリーは時間をかけて食事をしていた。
あれだけ特徴があっても、気がつかないものだ。ログにはリドリーが引退してから開いたカフェで、初めて彼女が食事やカフェに興味がある事を知った。つきあいは長くはないが職業柄短くとも濃い時間を共有する事は少なくなかったのだが。
「それ一口ちょうだい」
そして意外に食い意地がはっている。海老フリッターが取り上げられる。
「違う、食べたい訳じゃ……いや、食べたいんだが、味がどんなか知りたくてだな、店のメニューの参考に……」
ウエストが三桁の肉体をほこる者を見る目で見たつもりはログに

はなかったのだが、少なくともリドリーはそう感じたようだ。しっかり海老フリッターは彼女の口の中に納まっていた。
「それで、当面どうするんだ」
問われてログははっとした。そうだ。彼女に立ち止まらせて考える時間をたっぷりとあげてはいけない。そんな事になれば本当に大切な存在――彼女のカフェを思い出して故郷へ帰りたくなるだろう。
リドリーを再びハンター時代へ引きずりこんで、さあこれからというところなのにこんな初日から無駄足どころか墓穴を掘っている暇はない。
「……そうだな。お前、行きたいところとかあるのか」
「カフェ」
今居るじゃねぇか。と言いたい。が、カフェはカフェでも全国津々浦々の何千何百とあるいろいろなカフェに行きたい、の意味だろう。それは分かっている。
「そういえばリドリー。お前はなんでそんなにカフェが好きなんだ？」
理由が何か一つくらいありそうだが、ログはその理由を知らない。その執着心はハンター業にも勝る。まるで人生かけているその様には原動力になるものがあるはずだ。
リドリーは訝しい顔をしたが、ログがうさんくさい笑みを瞳から消すと渋々ながらといった様子を表す仕草をしてから顔を上げた。
「……昔、師が……」
師匠のくだりで早速ログの顔に質問したがりの三歳児のようになったために会見は中止した。
リドリーはカプチーノの入ったカップをあおいだ。もう彼女は食事を終えていたがログは珍しくまだだ。
遠くで鳥がさえずった。昼下がりの午後。のどかな風景の中、剣呑なログがリドリーを睨む。
よい天気だった。それで？　と問うのも忘れてログはしばらく黙

りこんでいたのだが、いくらたっても返事が来ないので頬をひくつかせてリドリーを睨んだ。
「…終わりかよ」
「さーて、どっかにBランクのカモでもいないかな」
話を逸らすリドリーは口ぶりもわざとらしい。触れられたくない話なのか、からかわれたくないのか。どちらにせよログにはもう立ち入る余地はないようだ。彼女の過去は今やセキュリティの中にある。
まだ彼女の心の内をもらせる相手になっていないようだ、ログは。心中こっそりため息をつく。仕方がない、彼女に合わせるしかない。これからもリドリーと連れ立っていくのなら。
「カモってお前はまた、スリのカモ探すみたいな言い方しやがって」
単純に面白いと思ったから口にしたのだが、リドリーは不機嫌になる。
「まずはてめぇからカツアゲしてやろうか、あァ？」
何故かログが凄まれた。

第二話　カフェ修業3

翌日、二人はもう一度魔獣狩人（ハンター）協会支部を訪ねた。受け付けの男はうっすらと焦ったような笑顔を見せた。

「すいません丁度今、Cランクの手配書を持って行かれた方がいましてねぇー」

リドリー、ログ両名が歴戦のハンターの顔で職員を見やると彼は慌てた。今自分を守れるのは自分しかいないのだ、というような慌てぶりだ。

「止めたんですが聞いてくれなくて」

ハンターは手配書の重複を特に問題視しないが、暗黙の了解として一枚の魔獣の手配書には一組あるいは一人のハンターがつきもの。正式な依頼などない手配書の魔獣討伐は基本的には早い者勝ちだが、先に出会ったものが討伐の許可を得るようなかたちになる。

誰かは知らないがCランク手配書を持って行った者たちはルール違反ではない。だが協会を通して口約束でも予約を取り付けた手配書に限ってはそうではない。基本的に協会はモラルがしっかりと暗黙の内に表れている。荒くれ者も多いが、少しでも表面上は規律を見せないと協会運営も厳しいと……話は広がるので割愛。

「そいつぁ、どんなヤツだ？」

横取りとはいえ気にしないハンターも居るだろうが、ついさっきの事というタイミングの悪さに加えて予約を横から取るのは少しばかり気に食わない。ログは元より、自分のテリトリーの中に入れたものが害されるのを嫌う。平和な支部のCランク手配書すら今や彼のテリトリーに入っていた。

「それが、目立つトサカみたいな頭のギター持ったヤツと、髪の長い陰気そうなヤツの二人組でして。なんだかもう私の話を聞いてくださらないんですよ」

目尻を下げて職員は弁解するように横取りハンターたちの特徴を

口にした。
「手配書に載ってた魔獣は？」
「小型の魔獣です。名前は確か……忘れましたが、見た目はペットみたいなもんで、見ればすぐに分かります」
ハンター協会の人間であるというくせに、魔獣の名前が分からないというのはいかがなものか。二人はそこもツッコミたいところではあったが、しかしながら魔獣の種類はそれなりに多い。リドリーやログのようなハンターであっても、その全てを把握するのはかなり難しい。
だが、職員の説明では理解するのが難しいではないか。
「分かるか」
今度はリドリーに睨まれ、職員はあれ自分女の人にビビってる？と自分の情けなさに泣きそうになっていた。
「まあいい。行くぞ」
ログは時間が惜しいとばかりに支部を後にする。職務怠慢を責める上司のような目でリドリーは職務をねめつけると部屋を出た。
職員はなんて怖いハンター夫婦なんだ、と勘違いしつつ二人が去った事にひどく安堵していた。

街に出ると、辺りにハンターが居ないか探す。歩きながら、手配書略奪犯人を探す。
「おれの獲物を横取りするたあいい度胸だな…」
ログはどの毒が一番相手を苦しませて殺せる毒薬かを選び出そうとする科学者のような顔で口角を上げた。不気味だ。リドリーにとってはログの得体のしれない部分かもしれない。

とはいうものの、今回のような口約束の予約を横取りはよくある話ではあった。それもほとんどハンター業に対する姿勢が金が儲かるからという理由で続ける手癖の悪いチンピラ崩れの間ではあるが。一部のハンターたちは自分自身の仕事に誇りをもって接している。同じ仕事仲間のハンターには大抵敬意を払うし相手には対等に接してほしいと願っている。それゆえ予約横取りなどというモラルに反する行為をよしとはしらい。相手の信用を失うし、今後も他の仲間からパーティーに入れてもらえなくなる可能性もある。

「なんだかんだ、あれくらい普通だろうに。お前も前一回やってなかったか？」

まだログとリドリーが出会って間もない頃だったからログにいい印象がなかった頃だ。偶然どこかの支部で会ったログは、機嫌が悪そうな態度に似合った行為をしていた。リドリーは特に悪い事だとは思わなかったが、ログの評価が下がった気がする。

「……今は必要だろうが」

旅支度が甘いのが気にかかる。ログはまだしも、リドリーはほとんど武器セットしか持っていない。このままの状態で行軍を続けるのは難しい。

何よりリドリーが自分のカフェに戻って行くのを防ぐためには魔獣討伐は必須条件だ。ログの方の事情はいささか急いだものとなっていた。

「ま、いいけど。久々にマトモな魔獣退治で腕がなる……」

ログは横取りを取り返すのがマトモな魔獣退治か？　と言いたい。しかしリドリーまハンター気分にすっかり戻っている自分に違和感を覚えたようで言葉が尻すぼみになる。傍目にも内心で自問しているだろう事はよく分かる。

「二手に分かれよう」

とりあえず今は他に意識を集中させてやろう。ログが指さしたところ、リドリーは思いついたように顔を向ける。

「捜索羅針盤（サーチ・コンパス）を使おう」

武器セット一式の鞄の中に攻撃目的以外使える魔法具がある。今この瞬間にふさわしい魔法具が。

「早く言え」

「待って今出すから」

何を口にすればいいかは分かっている。ハンターたちの特徴、そして彼らの持つ手配書。探しものを捜索羅針盤（サーチ・コンパス）に向かって言うと、情報量が多ければ多いほど探しものの正確な方位を示してくれる代物だ。

コンパスは東南をさした。二人は走り出す。

結果を先に言えば、横取り犯は見つからなかった。それより早く、魔獣の方を先に見つけた方が良い事に気がついたのだ。

魔獣についての情報は曖昧で、足取りをコンパスでたどるのは難しかったが山の中に入ると確かに方角は合っているようで、反応があった。

「ヤツらはコンパスのようなものは持っていないようだな」

リドリーは無言で頷く。それでも二人もまだターゲットの魔獣を探し出せてはいない。

お互いに相手の位置が分からなくならない程度の距離をとって捜索を続けた。

しばらくするとログが声を上げる。

「見つけたぞ！」

しかし、多分。と続いた。二人は目当ての魔獣の正確な名前と姿を知らない。

駆けてきたリドリーが目にしたのは、この状況では彼女は見たくなかったものだった。

白い体毛、長い尻尾。キツネにも似ているがその耳の長さと真っ赤な瞳はキツネとは違う。体躯も子牛ぐらいはあり、爪も非常に鋭

い。
　しなやかな毛並みに、うっかりするとかわいい部類に入りそうな魔獣。しかしリドリーはかわいい魔獣だからといって手をゆるめるような人間ではない。ハンターは見た目にとらわれてはいけないのだと教えこまれたからだ。
　ただ今は、魔獣がアレに見えた。
「白い……猫……！」
　猫とはあまり似ていないが、カフェ・シャブランの名前を思い出させる。
「猫か…？」
　律儀なログのツッコミにも気がつかない。てゆうかいつの間にかログがツッコミなのか。
「来るぞ、構えろ」
「素敵カフェの…白いモットー……」
　なんだかリドリーにはあの魔獣がカフェ・シャブランの象徴に見えてきた。てゆうか、昼前に食べたレアチーズケーキに見えてきた。美味しそう。あの瞳はラズベリーソースに見立てられる。
「おい？　お前まさか見た目で油断してねぇか！」
　リドリーのカフェに新生レアチーズケーキを出そうか。ラズベリーソースがけを加えたレアチーズケーキ。よさそう。
「おいリドリー！」
　ログは焦った。リドリーは、その辺の小娘のように人を見た目では判断しないし、まして魔獣相手では絶対に油断する事はないはずなのだ。彼女は、女である前に一人前のハンターなのだから。
　そのまま、魔獣が飛びかかってくるかと思った。リドリーは防衛本能で銃口を魔獣に向けた。その時に目が合った。赤い目だ。
　きしゃあと魔獣か吠える。引き込まれるように瞳を見た。赤い瞳の中に映る自分を。
　地面だ。
　揺れる視界。地面に倒れこもうとすると強い力が上に引っ張り上

げる。彼女は自分の腕の先にいる人物を見上げた。顔が陰っていてよく見えないが身なりで思い出した。パン屋の店主だ。引きずられるようにして彼に連れられる先はよく分かっている。

リドリーを役立たずと罵る裏切り者たちの住む場所だ。

パン屋の店主は目的地に着くなりがなりたてる。身をすくめるリドリーの目に、壁から覗く小さな影たちが映る。早速逃げ遅れたリドリーをバカにするような目で見てくる。負けるものかと睨んでやるが、そこで院長が現れる。

パン屋は院長に愚かな子供たちの悪行をまくし立て、どう落とし前をつけてくれるのだと締めくくった。院長は弱った顔でパン屋の手を両手で握る。

リドリーたちは結局何も盗めていないのに。

パン屋は去った。院長の説教から逃れるために、リドリーは一目散に逃げ出した。

「何やってやがんだリドリー…！」

リドリーの体をかかえて、ログは苦戦していた。相手は単純な攻撃だけでなく、何かを種に害をなす術を持つ。動きが素早く意識のないリドリーをかかえたままでは上手く対応出来ない。リドリーにどんな術がかかったかも分からず、警戒のあまり次の手を打てずにいた。

「おやあ？　まさか君たち、我らの獲物を横取りしてないかい？」

更には横取り犯を発見した。一人はニワトリのトサカのような形の髪を持ち、背中には何故かギターケースをしょっている。もう一人は腰近くまである長い髪をまっすぐに地上へ向けておろしている。どちらもシルエットがよく目立つであろう人物だ。彼らがハンター協会職員の言っていた手配書を奪ったハンターなのだろう。

顔を覚えてからしっかりと舌打ちをすると、ログはリドリーの体

を茂みの中に横たえた。
「それはこっちの台詞だ」
「我らが先に見つけていたのだぞ」
「そうだそうだ」
邪魔をする二人組に、さすがに人間を殺す訳にはいかないのでログは苦虫を噛んだ。
と、何もないのに二人組の一人が叫び声をあげた。その目は焦点が合わずに、ここではないどこかを見ているようにさまよっていた。
「うあああ！　やめろ、やめてくれー！」
長髪の方が見えない何かを振り払うようにもがき始め、もう一人は相棒の豹変した様子に目をむく。落ち着かせようと近づいて瞳孔の開ききった相手に顔色を青くする。
「どうした相棒！」
ところが、トサカ頭の方もまた、困惑して後に魔獣に視線を投げてしまった。
目を合わせてしまった。魔獣と。術の効果が現れた。
「……う…っ！」
もう一人のトサカ男も倒れる。苦悶に歪めた顔はここではないどこかへ行ってしまったかのようだ。
彼らの事はかまってはいられない。ログは放り出したリドリーも今はいないのだからと剣を手にして動き出す。もしかしたらという思いから、ログはなるたけ魔獣と目を合わせないようにしていた。そうなると相手に確実な傷を負わせられないのではなかという危険はあったが。
だがログはハンターの中でも腕利きだ。相手の動きを全て追う事は出来なくとも、その形を追う事は出来る。力ある生き物が放つ独特の気をたどって、力を振るうべきところでログは切りつけた。
やったかと思うと、リドリーがうめき声を上げた。
「ううっ……！」
振り返ってみると茂みから体を出してうごめくリドリーは苦しん

でいた。外傷はないのに何故。

第二話　カフェ修業４

『お前の……』
『……い、ごめんなさい…』
『……だ、お前がそんな……』
悲しんでいる。あの人が、涙を流している。
何もなくなった。
『やめろ……』
動かない四肢。
『こんなものを見せるな…！』
小さな手。
『やめて…』

「やめてくれ！！」
悲痛な叫び、戦闘時であってもリドリーのような歴戦のハンターにはあまりない事だ、ログは目を見張る。
「リドリー？」
気をとられていたログは魔獣の接近を許してしまう。慌てて応戦するが、その瞬間魔獣の赤い瞳を見てしまった。血塗られたような真っ赤な瞳だ。まるで魅入られてようにログはそれから目が離せなくなる。
「――――…！」
心臓が強く脈動する。繰り返し見て封じたはずの悪夢が蘇る。錯覚した。あの日に戻ったかのような。世界が漆黒へと変わっていく。消える、現実世界。蘇るのは――。
ログはナイフを振り上げた。自分の足に。文字通り突き刺すような痛み。神経でも焼ききられるような一瞬の突き上げる感覚と、激

痛がログの身に襲ってきた。その代わりに、闇は振り払われた。広がる世界は、リドリーが転がって、青い空の下、山中にて魔獣と対峙していた自分という現実。

荒い呼吸を持った、足に傷を持つ男が自分だと思い出す。

「精神攻撃か……」

ログは目の前に広がる光景に安堵した。赤い瞳の魔獣はどうやら、人の心に打撃を与える事が出来るらしい。今はまだ、あの魔獣は手傷も負ってこちらにすぐには飛び掛ってこないようだ。視界にそれを入れておきながら、決して中心には据えずログは大きく息を吸い込んだ。

目を閉じると、またあの映像が蘇りそうになるが、魔獣の気配だけをたどるとイメージをはっきりさせる事が出来る。

長銃を撃つ。赤い瞳目掛けて。

「ぎゃうっ」

目を見開くとそこには魔獣が絶命していた。死した魔獣の吐き出すヘドロから避けるためにリドリーを抱えて距離を取る。あの二人組は遠くで倒れているから問題はないだろう。

「やめろ、やめてくれ……」

うわごとを言うリドリーに、ログは頬をぶっ叩いて気付け薬の代わりとしたが効果はない。ログの場合は肉体的な痛みが精神攻撃を上回り無効にしたが、リドリーの場合はどうだろう。鼻をつまんで息を止めてみる。

殴られた。悪夢にうなされていても反撃は忘れないリドリーだった。ログはあまり彼女を傷をつけたくはないのだが、このまま起きないのでは困る。

「目ぇ開けろ、リドリー」

ハンター業などやっていると、仲間の死や自身の手負いなど苦い記憶が多くなる。魔獣の精神的攻撃は普通の農家よりは効果的だったろう。一体彼女は、どんな悪夢を見せられているのだろう。ログには想像するしか術はない。

歪められた眉に、苦悩がひしひしと刻み付けられている。
『伝えてくれ、あの人に……俺は…』
『……あんたのせいよ！』
記憶はランダムに再生される。リドリーが必死になって心の奥底に閉じこめてきた諸々の悪夢たちが。
四肢がバラバラになる――――。
『…あの人に……愛していたと……』
『起きろ、リドリー』
『…い、お前はおれが鍛えて……』
『起きないとキスするぞ』
稲光が闇を切り裂いた。

不快な発言に瞼を顔を上げると衝撃が頭に走った。
「痛っ」
痛む頭に、見上げるとログが顎を押さえている。リドリーが推測するに、ログの顎とリドリーの頭がぶつかったのだろう。地面に寝かされている自分を覗き込んだログという格好で、距離を取ったログがいなくなったのでリドリーは体を起こした。
「……なんだ…？」
それ以上は状況が飲み込めない。何がなんだったか、そもそも何故にログと一緒にいるのかも分からなくなる。リドリーは一瞬でこれまでに起こった事を思い出すような事は出来なかった。
「元気そうで何よりだ」
リドリーの頭突きが余程の痛みをもたらしたのか、どこか恨めしそうにログは顔をひきつらせる。
「悪い。そういえば……魔獣はどうなったんだ」
徐々に思い出してきた。リドリーはログと共に魔獣を追って山に入った。魔獣に遭遇して、目が合った途端に、悪夢を――。

離れた場所で、魔獣は絶命していた。リドリーは表情を暗くする。
「……悪い、今回私は役立たずのようだったな…」
ログ一人で魔獣を倒したようだ。Bランクでもないｃランクの魔獣ならそれも当然の事、ログにはなんの苦労もなくこなせる仕事かもしれないが、同行したのに何も出来ないままで終わるのは彼女の矜持が許さなかった。
そして役立たずで終わった事がプロの魂を傷つけた。
「気を落とす事はねぇだろ。大した被害もなく終わったんだ。これでどっちか死んだら文句の一つでも言いたくなるがな」
顔をしかめるリドリー。納得がいってないのは、彼女のプロ意識の成せるものか。それにしても、時に生真面目な様子を見せるリドリーは、どうにもハンター業での足手まといを嫌う。どうしたものかとログは思案する。
「それなら、詫びにさっき言っていた事でもしてもらおうか」
「あ？」
「頭突きの前だ」
「まさか……？」
にやり、ログが笑った。リドリーは一気に顔の気温を氷点下まで下げる。リドリーは覚えていないかと思ったが、ちゃんと覚えているじゃないか。それでログは満足していた。だがリドリーは強く握った拳を差し出してくる。
「よし、頭突きがもう一回ほしいのか。拳でもいいか」
慌ててログは飛び退いた。

手配書略奪犯ハンター二人組は、ログが蹴り飛ばすと目を覚ました。ぼんやりとした瞳で生まれたての子羊みたいに頼りない顔でリドリーたちを見上げる。

「あれ……あんたたちは…」
「あの魔獣、倒しておいてやったぞ」
「ああ……？　あ…！」
泥棒の現行犯で見つけたみたいな顔になると、二人組は辺りを見回して魔獣の亡骸を見つけた。これはログが倒したのでそのまま協会に持って行く。彼らにしてみればすっかり獲物を奪われたに等しいだろうが、ぶっ倒れていたのだから仕方がない。それを二人組を認めざるをえなかった。
戦いに参加出来なかったのはリドリーも同じで不満だったために黙っておいた。
「……ヤツの、あれはなんだったんかねえ……おれは悪夢を見たよ」
「おれもだ」
頭に精神攻撃の余波が残っているのだろう、うつろに目をさまよわせた。
「魔獣の能力だろ。もう悪夢は終わった」
ログが事もなげに言うから、二人組は拍子抜けしたようだった。
「ああ…そうだな…」
そうでなくては困る。左手で右腕を抱えるリドリーもそう感じた。
魔獣は基本的には精神的攻撃はしてこないものだから皆戸惑った。だがもう魔獣は倒された。全ては元通りだ。
「手配書のことはこれでチャラだ」
お前らのした事は分かっているぞと、ログがたたみかける。思い当たる事がしっかとある二人組は、顔を合わせると気まずげに視線を逸らす。ログがいなかったら、この場は大惨事、全員精神攻撃にやられて死んでいたかもしれないのだ。今更抗議など出来るはずもない。
「…すまなかったな……」
「悪かった」
もごもごと二人組は謝罪した。
「だってよ。どうする」

わざわざログはリドリーにお伺いをたてる。むっとしてリドリーはそんな必要はないのに、といった目で睨む。「別にいいだろ」と返してやる。
「じゃあ、戦乙女に免じて許してやるか」
戦乙女――リドリーのハンターとしての腕が確かなものだと示す、揶揄のない二つ名の一つだ。以前はからかいをもって他のあだ名で呼ばれたりしたものだが、引退する前にはそう呼ばれた事もある。
「な……戦乙女って、まさかあのリドリー・プレスコット?！　百体殺しの?！」
二人組みの一人が指を指してきたので、リドリーは顔をしかめた。面倒だと思っているようだ。余計な事を言った相手に、何も今更それを持ち出さなくともいいだろうと睨みつける。
「うざいんだよ、死神」
そんなログの二つ名は死神だったりする。今のリドリーにとっちゃ疫病神みたいなものだが。
「げええ、し、死神があんた?！　そんな若いのに?」
「いや、若いって話だったじゃねぇかよ」
恐怖とほんのわずかな羨望が混じった四つの瞳。満足げにログが笑う。
「ま、これに懲りて手配書略奪は控えるんだな」
黒い空気をまとった死神の笑みだった。

「お疲れさまでしたー」
協会支部に行くと、Cランクにしては儲けた方の賞金をもらえた。これで当面は大丈夫といいたいところだがそうはいかない。またすぐに魔獣討伐をせねばならない程度の収入だった。
相変わらず元気のないリドリーが横にいてはせっかくの収入も感

動が半減してしまう。
「飯でも食うか」
晴れない空気。リドリーは顔をうつむけたまま頷いた。

「う、美味いこのレモンパイ……！　何使ってこんな味出すんだろーー！」
感激のあまり顔がゆるんでしまっているリドリー。カフェに連れて行ったらいつの間にか元気になっていた。
現金なものだというのも変な話だが、分かりやすい変化にログは呆れ顔をにじませる。
「これも食うか」
「もちろんだとも！」
目が輝いておもちゃを前にした子供みたいなリドリー。もはや自分のカフェのメニューの研究など関係ないみたいだ。
「この先を西に進むと、スターリーに着くが」
スターリーは空港を中心に栄えている町で、海外に行くだけが目的ではない観光客などが多く訪れ、また名産品の貴石や食物も人々の目当てとなっている。それだけあって、スターリーにもカフェが多いと聞く。リドリーの趣味には合う。
「ふーん。いいんじゃない」
ちなみに今日のカフェは≪ジゼル≫。元バレリーナの女性が店長の店で、バレエ音楽とバレエのごとき足取りでピルエットでも回りかねないノリで店を開店させている。若干違和感を覚えないでもないが、活発に動いている従業員というのは怠惰なものより良いという事だろう。
「私はいつか、大陸の南東にある紅茶鉄道に行きたいね…！」
リドリーたちの住む国とその周辺では、天然の茶葉が採れない。ゆえに全てを輸入しているのだが、それを仕入れやすくするために

発達したのが茶葉のための交通網だ。紅茶の茶葉と、上流階級を別荘に運ぶために走らせた鉄道が南東には存在する。
「鉄道おたくか…」
「違う紅茶ってゆうかカフェおたく！」
「なんだそら…」
≪ジゼル≫ではコーヒーと紅茶とレモンパイとサンドイッチを研究したリドリーは満足だった。
こいつ、食わせときゃいいなとログが思ったとか思わないとか。

第二・五話　町内視察

ティモールの町で、リドリーとログは入用のものを買出しに出ていた。ふいにログがリドリーを放置して店の中にこもっていると、リドリーの姿を見失ってしまった。

「あ？　リドリー？」

用事を済ませて、首をめぐらすとリドリーは見当たらなかった。小さく眉を寄せてログは相棒の姿を探す。またどこかのカフェにでも行っているのならばいいが、それでも今の彼らには潤沢な予算があるわけではないので、趣味は分かるがそうあちこちふらふらしてほしくはないと彼は考えていた。

リドリーのあの趣味は、豪胆で戦士然としている彼女を女らしいと思わせるのに一役かっている。ほほ笑ましい気もするのだが、やはり一つの事に夢中になると周りを忘れるところは好ましくない。

雑踏をうろつくと、やっとログは見慣れた黒髪を見つけた。髪は下ろしたままだが、つむじがこちらを向いている。何かに気を取られたのか、じっと動かない。リドリーの視線の先をたどりながら近づくと、ガラス越しに店の中を見つめているようだった。何を見ているのか、ログは店の名前をあおぐ。店内にはところ狭しと洋服が敷き詰められている。

「≪アラン・バークレイ≫……？　服屋か」

男女両方の服を扱っているようだが、どこにリドリーの興味を惹くものがあるのかログは気にかかる。彼女が流行のファッションに興味を持っているとは思えなかった。元々ハンターだったために、身なりにやたらと気にかける様子はなかった。とはいえあれでいて若い娘なのだから、何か惹かれるところがあったのかもしれない。

財布と相談をすれば、もしかすると彼女の望みを叶えられるかもしれない。どの服に心惹かれてるかを推測しても分からないので、ログは声をかける事にした。

「で、何を買おうとしてるんだ」
「ログ。別に何も」
「そうか？」
じろり、と彼女の本心を見抜こうとする瞳を向けられて、リドリーは不満そうだった。この青い瞳は何に夢中になっていたのか、ログは口を開かせるまでここを動くつもりはなかった。
服屋≪アラン・バークレイ≫は成金趣味の店ではないようで、一般庶民が日常的に着られる服を用意してある。サバイバルには向いてないが、特に夜会用というものも売っていない。あって精々、ちょっとしたお出かけ用のお洒落な服がある程度だ。装飾品もここからは見つけられないし、光り物に目がないと思われる女性の視線からは、何が琴線に引っかかるのか。
「上着……いや、靴もあるな」
「何の話だ？」
いぶかしげな瞳を向けられて、ログは彼女が白を切っているのだと思った。自分の趣味に余計な口出しをされたくないというのだろう。だが、そうはいかない。
「男装用の服……？」
「だから、何を言っているんだ？」
「お前の買おうとしているものを当てるゲームをしている」
「はあ？」
リドリーは、心底不思議そうに眉根を寄せた。ログの方は、彼女の言い分を疑って眉を持ち上げた。どこまでもとぼけるつもりなのかと思いきや、どうやらリドリーは本気でログの言っている言葉の意味が分かっていないようだった。
「何も買うつもりはない」
その言葉に嘘がないなら、リドリーは一体何を注視していたというのか。
「なら何を見ていた」
今度は、リドリーは困ったように視線をさまよわせた。言い逃れ

をしようとするものの顔をして、言葉を探す。「別に、何も見てない」と顔とは裏腹な台詞を吐く。
「まさか、男か」
冗談だった。ログにしてみれば、彼女をからかうつもりで言ったのだが、なんとそれは当たり（ビンゴ）だったのだ。言い当てられた事でリドリーは目を大きく開いて、どこを見ていいのか分からないのか小刻みに視線をうろつかせる。
「おいまさか、」
「ち、違う！　ちょっと、師に似てたから！」
ログは服屋の中をのぞきこむように顔を前に持って行った。よくよく見ると、≪アラン・バークレイ≫店の中には店員らしき男が居た。四十かそこらの男だが、顔はまあ、そう悪くはない。だが、あれにリドリーは心惹かれたというのか。どうやら彼女の師匠に似ているらしいのだが、あの男の観察はそう無意味な事ではないのだろう。が、ログは相手を見定めようとするのをリドリーに止められた。
「いや、ていうかよく見るとそんなに似てない！　いいから行くぞ」
ログは相手の男の年齢が彼らよりも高い事が気にかかった。まさか、リドリーは年上の男に魅力を感じるのだろうか。
「似てないから！　似ててもどうしようもないっていうかどうでもいいから！　行・く・ぞ！」
ついにはリドリーの腕力がものを言い、ログは歩き出さずにはいられなかった。自力で歩けば彼女は手を放す。
リドリーの師匠似の男の事も師匠の事も気にかかったが、ログには彼女が何か商品を買おうとしていたのではない事も、つまらなかった。入用なもの以外、彼女はほしがらないのだから。
「……何か、買い忘れはないのか」
「はあ？　ないよ！　たぶん！」
無駄に声の大きい女子を見て、ログは目を細める。何かが残念だった。そう、何がとははっきりと言えないが――。
「何か買ってやろうか」

「あ？　何言ってんの。まあ、あえて買いたいといえば新型の魔銃が」
「もういい」
「サイフォンも欲しいな……あ、それなら新しいレシピが欲しいな……」
ログは何かが非常に残念だった。先ほどとは違う意味で、頭を抱えたくなった。この娘の脳みそには、ハンター業に関わる事とカフェに対する情熱しか存在しないらしい。分かりやすいといえば分かりやすいが、ログには何か物足りなかった。
「……仕事道具以外なら、いつか一つ買ってやるよ」
呆れながらもログは言わずにはいられなかった。そんな未来くるのだろうかとは思いつつ。
リドリーは淡白な返事が返ってきた事に少なからず驚いていた。そしてその提案にも。何を企んでいるのだろうといぶかしみつつ、自分が欲しいものは生活必需品をのぞけばほぼハンター業かカフェ業の道具ばかりだと知っている。特に何かをログに要求するような将来はないだろう。
「そんなものあったらね」
手をひらひらと振るうと、意味深なログの瞳を避けるためにも首を勢いよく回した。
そんな未来は来ないだろうと、二人の同意見がくつがえされる日は来るのだろうか。どちらもその答えを知らない。

第二・五話　町内視察（後書き）

幕間的なお話です。
意図せずいつの間にかログ視点寄り。

本当はラブコメ方向に話を持っていきたかったのですが、あんまりそんな気がしません。
そのうちもっとラブコメさせたいです。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2026q/

ハンター×カフェ

2011年4月23日00時11分発行